

NPO

松川浦ガイドブックを持って避難所訪問、干潟に残ったかすかな生き物の気配

相馬市

新妻 香織 NPO 法人フー太郎の森基金 理事長

取材日 2011.5.13

98年の創設以来、フー太郎の森基金はアフリカのエチオピアで緑化と水資源開発に取り組んでいる。震災後は不定期で新地町の避難所や仮設に出向き、炊き出しやヘアカットなどを行った。相馬市の仮設入居に合わせ、市民に家庭用品や家具・電化製品の提供を呼びかけ、入居者に使っていただく会を開催するなど、支援活動に奔走した。

3月11日 14時46分

当日、フー太郎の森基金事務所にいた。宮城県沖地震も経験していたが、当時を上回る長い揺れを感じた。自宅兼事務所は岩盤の上にあるため、1階では皿が1枚割れる程度だった。しかし大津波警報が出たので、海岸近くに住んでいる両親を夫に迎えに行ってもらった。両親を連れて来た後、夫は飼い犬を連れにもう一度両親宅に行っていた。考えてみたら大変危険なことだった。

海拔15mほどの家で、一息ついてテレビに映る釜石市の津波のニュースを生中継で見た。とんでもないことが起きていることが分かった。ふと、自宅から南側の松川浦を見ると、いつもの風景が一変している。水が引いて真茶色になり、底が見えているのだ。普段水位が高いはずなのに…。そして東側の海岸の方を見ると、水煙で前の家が見えなくなっていた!急いで2階に登ると、スーパーや家がメリメリ音を立てながら押し流されてくる場所だった。辺りは相馬でも2番目に住宅が密集している地区であった。2軒隣まで瓦礫が押し寄せ、状況は緊迫していた。家族を連れ、さらに高台にある公民館を目指した。

高台の旅館や火力発電所にも多くの人々が避難していたようだが、この東部公民館にも200名程が避難していた。その中で、デイケアサービスの方が全身ずぶ濡れで震えていた。バスが津波にのまれ、何百mも流されたという。4人の老人のうち3人は、救出された後寒さで亡くなっていた。近くの保育園では園舎の前をどどん船が流れていく異常事態に、園舎にはしごをかけて子どもを屋根に登らせ、反対側の丘に降ろして公民館まで逃げてきていた。すんでのところは無事だった自宅からストーブ、食べ物、毛布、衣類を公民館に次々と運び、部屋に灯りを灯しラジオをつけて情報を流した。

相馬市の対応は早かった。中心地に津波の被害が及ばなかったため、当日22時くらいには迂回路を通過して自衛隊と市のバスが入り、水とパンを差し入れてくれた。そして電気のある町中の避難所



へと多くの人々を移動させるためにバスでのピストン輸送が続いた。

翌日、夫が新聞記者から「原発が危ない」と聞いた。「メルトダウン」という言葉に、チェルノブイリ級の事が起きていることがわかった。まだ、ニュースで伝える前の事だった。家族を連れ、すぐに相馬を離れた。その後は福島、二本松、山形県遊佐の知り合い宅へと避難した。ライフラインが復旧することがわかったため3月22日に相馬市に戻ったが、事務局の職員にはPCを家に持って行って自宅で仕事をしてもらい、事務所を預かりながら、避難所巡りを開始した。職員が事務所に戻ったのはGW明けからだった。

支援活動

早速3月末から取りかかった支援活動は、週3回、エチオピアコーヒー、家庭料理、市民で作ったガイドブックを持って避難所を回る。ガイドブックには元気だった頃の松川の町並みが掲載されている。家を流され、すべてを失った人達には、自分の店や思い出がいっぱい詰まったとてありがたいものになった。また、フー太郎の森基金の会員の方も被災されたので、週2回鎌倉にいる知人のビーチクリーンの若者達と共に、自宅の泥出しや片付けを行った。夫が有機農産物の卸をやっ

ている関係で、全国から生鮮野菜や食品が大量に届いたので、近所の家々、保育園、会員宅に配達した。

そして緊急支援物資が充分に行きわたると内容を生活支援物資に切り替えた。仮設住宅に入居するにあたり、細々とした日用品が必要となる。そうした、自立のために必要になる電化製品や家具、食器、調理器具などを集めた。配布会は仮設入居に合わせ、2週に1度計6回開催されるが、物資は午前中に集め、午後には被災者に配布するようにしている。鍋などの生活必需品から中古車まで、多くの市民の善意でたくさんの支援物資が集まってくる。

振り返って

被災した人としなかった人で温度差があると感じることもあるが、日本は今回の大震災で多くを学んだと思う。今回の大震災は日本の「リセット」だと思っている。私たちは新たな価値観を持って生きていかなければならない。無駄に電気を使う生き方ではなく、自然にマッチした生き方とはどういうものなのかを考え直す時期にきていると思う。震災で神社や古くからの墓地が高い所にある理由がわかった。これらはすべてが残った。自然の脅威の前では人間はいかにも弱々しい生きものだ。自然に抵抗しない、「沈下橋」のような構造物、生き方が大切だと思うようになった。

東北で最も広大で生物多様性の高かった松川浦の干潟は、生物の気配すらない状態になってしまった。そんな状況の中、嬉しいことにかすかに生き残った生物を確認することができた。会員の方の家の片付けをしている時、掘りごたつの中から「ヤマトオサガニ」2匹が生きのまま出てきた。震災から38日目の出来事だった。生き物たちがどんな形で戻ってくるのか、長い時間をかけても記録していきたい。遅く生き残ったものたちが、子孫繁栄して新たな生態系をつくっていくことを期待して見続けていきたいと思っている。



撮影：2011.5.13 松川浦



撮影：2011.5.13 電線のない真新しい電柱



撮影：2011.5.13 津波の威力を物語る車